



2008年6月25日放送

消化器領域と漢方医学

東海大学 医学部 東洋医学講座 准教授 新井 信

(4) 腹痛、腹部膨満感と漢方

シリーズ第4回目は「腹痛、腹部膨満感と漢方」についてです。

腹痛や腹部膨満の原因は機能性のものだけでなく、背景にさまざまな器質疾患がある場合が少なくありません。中には西洋医学的治療を優先させなければいけないものがありますので、ここではそのことも考慮した上で、腹痛や腹部膨満を漢方治療でどのように治療するのかを述べてみたいと思います。

〈腹痛の古典的とらえ方〉

まず、腹痛に関してですが、古典では心窩部周辺に生じる痛みを心下痛あるいは心痛、胃脘痛、脾疼などと表現しています。また、『傷寒論』『金匱要略』に記載された小建中湯の条文には、腹中急痛、腹中痛という表現なども見られます。腹痛を訴える特殊な病態として、寒疝や奔豚気などがありますが、これはあとから解説いたします。

〈腹痛の漢方治療〉

腹痛を治療する場合、まず痛みの部位と性質すなわち寒熱を鑑別する必要があります。

実際には、消化管攣急による腹部疝痛、colicky pain、見方を変えれば抗コリン薬が効くような腹痛に対しては、第一に芍薬を含む処方を考えます。上腹部痛であれば柴胡桂枝湯や大柴胡湯、四逆散などの芍薬を含む柴胡剤で、この中で最も広く応用できる処方が柴胡桂枝湯です。潰瘍症状型 NUD、消化性潰瘍、軽症の慢性膵炎など、本来の虚実中間証、胸脇苦満、上腹部腹筋緊張という使用目標に合わなくても、効果があることが少なくありません。また、六君子湯エキスと柴胡桂枝湯エキスの合方で代用できる柴芍六君子湯は、このような患者で食欲不振や胃もたれがあるような場合に用います。大柴胡湯は頑丈な体格で胸脇苦満が顕著なものの上腹部痛が目標です。しかし、胆石発作など上腹部の急迫的な痛み、すなわち邪実であれば、体格が実証でなくても使用する機会があります。

〈上腹部痛〉

芍薬の次に考えるのは、痛み以外の機能性ディスぺプシアに用いる処方の応用です。すでに前回お話ししましたが、安中散は胸焼けなどの過酸症状に加え、胃炎などによる鈍い持続痛がある場合に考慮します。その他、六君子湯や半夏瀉心湯なども応用できますが、前回解説いたしましたので、ここでは割愛します。

〈臍周囲痛・下腹部痛〉

次に臍周囲や下腹部に痛みを訴える場合は、小建中湯などの建中湯類を考えます。これは次回の話題ですが、腹痛と便通異常を主訴とする過敏性腸症候群には、その中心処方である桂枝加芍薬湯が第一選択となります。この処方に膠飴、すなわち麦芽糖を加えた処方が小建中湯で、さらに虚弱が甚だしいものや腹痛が激しいものに用います。すぐにおなかを痛がって学校も休みがちな虚弱な子供には、この処方がとてもよく効きます。これでも効果が不十分な場合、芍薬甘草湯を頓服として服用させるとよいでしょう。その他、建中湯類と呼ばれるものには数多くの処方がありますので、うまく使い分けてみて下さい。

また、月経に関連した腹痛や下腹部に瘀血圧痛を伴う腹痛であれば、一般には当帰芍薬散や桂枝茯苓丸などの駆瘀血剤で対処しますが、これは婦人科的な話題ですのでここでは省略します。

〈特殊な腹痛〉

その他、西洋医学では説明しがたい特殊な腹痛として、冷氣などの寒冷刺激によって誘発あるいは増悪する慢性的な下腹部痛を寒疝と呼んでいます。その痛みは時に上腹部や腰部、背部、会陰部、四肢、頭部などまで及ぶだけでなく、下痢やめまいなど、さまざまな症状を併発することもあります。一般には当帰四逆加呉茱萸生姜湯をよく用いますが、腹部膨満を伴う例では大建中湯などで治療します。また、下腹部に生じた違和感が、動悸や息苦しさとなって胸から咽へ繰り返して激しく突き上げてくる感覚を奔豚気と言います。こ

の中には腹痛を訴える場合があり、桂枝加桂湯や奔豚湯、苓桂甘藷湯などを用いて対処します。寒疝も奔豚気もその概念を知らないと治療の糸口が見つかりませんので、このような特殊な病態を理解しておくことをお勧めします。

〈腹部膨満の漢方治療〉

次に腹部膨満です。腹満の治療では、虚実を鑑別することが重要です。脈、腹ともに力があり、便秘して、腹部全体が膨隆している場合は実証の腹満です。これは六病位では陽明病に相当し、大承気湯や小承気湯などの承気湯類を用いて下します。

一方、脈に力がなく、腹壁が薄くて軟弱無力、あるいは突っ張っている場合は、虚満と呼ばれる虚証の腹満です。腹部術後の腸閉塞などはこれに相当すると思われます。治療は大黄の入った処方下すと症状を悪化させることが多く、大建中湯や小建中湯などで腹部を温めて機能を向上させることを考えます。また、ガス貯留を気のうっ滞と考えて、厚朴や枳実などの気剤を考慮することもあります。

〈腹部膨満の処方〉

実際の治療では、実証の腹満は承気湯類などで下せばよいのですが、虚証の腹満を如何に改善させるかが問題です。そこで、最もよく用いられる処方が大建中湯です。大建中湯は腸管癒着による腸閉塞など、腹部にガスが貯留して膨満感を訴える虚満に頻用され、多くのエビデンスも報告されています。このような病態は腹部の冷えと考えられますので、腹巻きやズボン下で腹部を温めるというような生活指導も併せて行うと一層効果的です。また、過敏性腸症候群のような状態で生じる腹部膨満感は桂枝加芍薬湯の適応です。もしも、大建中湯だけで効果が不十分な場合はこれら 2 剤を併用して、いわゆる中建中湯にするとよいことがあります。さらに、エキス剤にはありませんが、虚満でみぞおちがつかえて嘔吐し、大建中湯が応じないものに厚朴生姜半夏甘草人参湯がよい場合もあります。

〈症例提示〉

最後に寒疝の症例を呈示します。

症例は 23 歳、女性。主訴は冷えと腹痛。10 歳頃より気温低下や冷房で手足が冷えて痛むようになりました。冷えにより月経痛が悪化し、腹鳴と腹部疝痛を生じて下痢となり、同時に吐き気を伴う頭痛を起こします。夕方には倦怠感と眠気が著しくなり、最近では、少し冷えただけでも右足の付け根が痛み、ひどい時には腰まで広がり動けなくなるそうです。また、のぼせやすく、月に 2~3 回は鼻出血があります。便通に異常はありません。

身長 158cm、体重 52kg。顔色は紅潮し、舌は淡紅色で、薄い白苔を認めます。脈は沈んで弱く、1 分間に 52 回と遅脈です。腹証では軽度の腹部動悸と右下腹部に圧痛があり、下肢には冷感を強く訴えます。そこで、症状は多彩ですが、いずれも寒冷刺激で増悪するため、寒疝と考えて当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキスを処方しました。すると、2 週間後には腹

痛、腰痛、頭痛、月経痛などの症状が消失し、さらに倦怠感や眠気、下痢、鼻出血も2ヶ月後には改善しました。今まで汗がほとんど出ませんでしたでしたが、その年の夏は気持ちよく発汗したそうです。冬になっても症状は再燃しないため、翌年の春に廃薬としました。

この症例では、冷えの他、寒冷で増悪する腹部疝痛だけでなく、手足の痛み、月経痛、腹鳴、下痢、吐き気、頭痛、倦怠感、眠気、右鼠径部痛、腰痛、のぼせ、鼻出血、無汗の15もの症状が、当帰四逆加呉茱萸生姜湯1剤で改善しました。病態をうまく見抜くと、このように著効を示す場合もあるということです。